自我意識の条件

――『モナドロジー』§§29-30注解――

中　野　裕　考

お茶の水女子大学　人文科学研究
第９巻（2013）別刷

人文科学研究　No.9, pp.125-132　　March 2013

自我意識の条件

――『モナドロジー』§§29-30注解――

中　野　裕　考

問題の所在

本稿の目的は,『モナドロジー』§§29-30をもとに自己意識の内実と条件を探ることである。ここでは「反省的作用」が「「私」と呼ばれるものを考えさせる」働きとして示され，こうして与えられた自己意識が,「存在」「実体」その他の形而上学的諸概念の把握や神の認識，さらには我々の理性活動［raisonnement］の対象を与えるとされる。自己意識を起点として形而上学的諸概念が把握されその他の認識が得られることは,『人間知性新論』(以下『新論』) など多くの箇所でライプニッツが繰り返し述べていることである(1)。知性にとって知性自身や「存在」「実体」などの形而上学的諸概念は生得的だから，知性が自分自身を反省しさえすればこれらの概念は把握される，というわけである。このように自分自身と神を認識することで人間は単なる動物から区別され，理性をもつとみなされるようになる。

従来，ライプニッツの自己意識理解を問う場合に,「反省［reflection］」「統覚（気づき）［apperception］」「意識［conscience, consciosité, conscienciosité］」といった用語の用法の分析がしばしば試みられてきた(2)。こうした作業ももちろん必要だが，ライプニッツがこれらの語を内容の確定した用語として整理しているわけではない(3)ため，自己意識そのものを問題とする際には焦点がぼやけてしまう傾向がある。そこで本稿では手法を変えて『モナドロジー』§§29-30に焦点を絞り，ライプニッツにおける用語の意味の確定を目指すよりはこのテクストに現われた「私」に関する意識という事柄そのものの内実を探ってみたい。

ではなぜ『モナドロジー』§§29-30なのか。それは，このテクストが自己意識の成立について特異な論の組み立てを提示しているためである。確かに「反省的作用」が「「私」と呼ばれるもの考えさせ」るという説明は，とくに珍しいものではないかもしれない(4)。しかし一般的になされる説明では，この反省は孤立した自我が自己自身を対象として行う心的作用であり，これによって自我ないしその作用は自我自身に対して現前し対象化されることになっている。我々自身を反省することによって形而上学的諸概念を把握するというライプニッツの主張をこのような意味で理解する論者も少なくない(5)。これに対して『モナドロジー』§30は,「必然的真理の認識とその抽象によって，我々は反省的作用へと高められる」と告げている。これは「反省的作用」の条件として「必然的真理の認識とその抽象」を挙げているものと考えられる(6)。またそれだけでなくこの一節は自己意識を我々における「制限」の認識および神の認識と結びつけている。そこで本稿は『モナドロジー』§§29-30のこのような特異性にあえてこだわり，次の二点に答えることを目指す。第一に，必然的真理の認識が「反省的作用」の条件であるのはなぜか。第二に,「反省的作用」によって「私」という意識をもつことが，なぜ自己の制限と神の認識と結びついているのか。

1　必然的真理

ここでの「必然的真理」ないし「永遠真理」の内実を探ることから分析を始めたい。「必然的真理」ということでまず思いつくのは，後続の§33で「事実の真理」と区別される「理性活動の真理［verités de raisonnement］」であろう。それは反対が矛盾を含むという意味で必然的で，矛盾律に従って洞察されるような真理である。『モナドロジー』§§29-30と近い『原理』§5でも，「本当の理性活動」がそれに依存する「必然的ないし永遠真理」として，「諸観念間の誤りのない連結と確実な帰結づけ［consequences］を行う論理，数，幾何学の真理」が挙げられている（GP VI, 600f.＝邦訳9，249）。だとすると反省の必要条件となっている必然的真理として，矛盾律に基づいて導出できるような理性活動の真理をまずは挙げることができる。

ただし§§29-30に先立つ数節を見ると，これだけでは十分ではないように思えてくる。この数節でライプニッツは，以前自分をぶった棒を見て逃げる犬に言及し，犬でももつような経験的で偶然的な表象連結に対して理性ある魂が知る必然的真理を際立たせている。この話題は多くの箇所で繰り返される（GP IV, 525f.; 527; GP VI, 87＝邦訳6，97-99; GP VII, 331f.＝邦訳9，28-30）が，たとえば『原理』§5（GP VI, 600f.＝邦訳9，249）の要点は次の点にある。動物の表象連結も「理性」に似たところがあるが，それは「事実ないし結果の記憶」に基づくだけで「原因の認識」に基づかない。人間もたいていは同じように「経験派の態度」をとっており，今までそうだったから明日も日が昇るだろうと思っているだけである。天文学者はそれに対して「理由によって」そう判断する。この判断は「諸観念間の誤りのない連結と確実な帰結づけ［consequences］を行う論理，数，幾何学の真理」のような必然的ないし永遠真理に依拠している。

たまたまそうなったにすぎない「事実ないし結果の記憶」を一般化してしまう経験派の態度と，理性でもって必然的真理を認識する態度の違いについては別の箇所でも触れられている。ベールの事典に対するコメントでもライプニッツは，理性の有無を，たまたま結果的にそうなった，というだけでなくそこに「同じ理由」（*cf.* A VI, 6, 475＝邦訳5，287），「必然的な理由」（*cf.* GP VII, 331＝邦訳9，28-30）があることに基づいて表象連結を行うことができるかどうかという点に求めている。このことを指して用いられる表現が「論証的三段論法」（GP IV, 526f.）であり，「正当な形式に則った真理と反論の連鎖」（GP VI, 87＝邦訳6，97-99）である。『新論』の言葉でいえば，「形式に適った議論」，すなわち「形式の力によって結論づけ，そこに何も補う必要のないようなあらゆる理性活動」（A VI, 6, 478＝邦訳5，292）である。このような意味での「推理の能力［faculté de raisonner］」（A VI, 6, 475＝邦訳5，287）こそ，動物とは区別される人間だけに見られるものなのである。

そうだとすると，『モナドロジー』§§29-30が言及する「必然的真理の認識」とは，後続の§33で導入される「事実の真理」と「理性活動の真理」との区別の手前にあるような一般的な能力のことと思われる。つまりそもそも「形式に適った議論」を通じて観念間の確実な連結を認める能力，たとえば棒を振り上げる人間を前にかつてぶたれた経験を思い出したとしても，かつてと今とで「同じ理由」「必然的な理由」があるのかどうかを見分けることができるといった能力である。あるいは毎日太陽が昇ると考える際に，経験的な観察にも依拠するとしても幾何学や算術の規則に従って結論を引き出せるといった能力である[(7)]。従って§§29-30が問題にしているのは，「事実の真理」から「理性活動の真理」を区別することというよりは，そもそも一般に「必然性」の観念をもっているという，より基礎的な次元の事柄である。す

なわち不確実な観念間の連結に対して確実なものを際立たせ，それに「必然的」という地位を認めるという次元のことである。

2　制限

『モナドロジー』§§29-30に特徴的なもう一つの点は，ここでライプニッツが自己意識を「神の認識」とセットで扱っていることである。反省的作用によって我々は「我々においては制限されているものが神においては制限なしにあることを把握する」。ここで反省は自分自身の「制限」の認識，また神の無限性の把握を伴っているようなのである。

『モナドロジー』§§29-30の真の主題は，実は理性でも自己意識でもなく，むしろこの「制限」だと解釈することができる。§30が参照指示している『弁神論』序文の第四段落でもライプニッツは，反省，自我，あるいは理性や必然的真理について，意外にも全く触れていない。むしろこの一節の主題はもっぱら神への愛である。これら二つのテクストの間で共通する話題があるとすれば，それは，我々にあっては制限されている完全性が神においては制限なしにあること，そして神の無限の完全性を我々は「我々のうちに」見出すということ，この点である（GP VI, 27＝邦訳 6 , 14-15）。これを考慮するなら『モナドロジー』§30のいわば隠れた主題は，自己意識において我々が，自分の完全性が制限されてあることを知ると同時に，神の完全性は制限なしにあることを知る，ということだと考えられる。

ここで重要になってくるのは，『弁神論』§20でライプニッツが，我々が制限されてあるということを一つの永遠真理として位置づけているという事実である。それによると我々における制限の大元にある「被造物における根源的不完全性」は，「神の知性のうちにある永遠真理」に含まれた「被造物の観念的本性」に由来する（GP VI, 114f.＝邦訳 6 , 137-138）。それはつまり，何か特定の悪行を行ったかどうかにかかわらず，「被造物は本質的に限定されている」ということ，あるいは制限されてあることが「被造物」の本質に属するということである。

実際，「被造物［creatura＝creatus＋ura］」の概念のうちには受動，受容，ないし受容性［passion, reception, receptivité］（GP VI, 121＝邦訳 6 , 146）が含まれている。この受容性が被造物における制限の根拠である。『モナドロジー』§47もいうように，造られたモナドは「被造物の受容性によって制限されており，この被造物にとっては限定されてあることが本質的なことなのである」（GP VI, 614＝邦訳 9 , 226）。他方，神の作用だけが「純粋」なのであり，「受動［patir］」を一切まじえることがない（GP VI, 121＝邦訳 6 , 146）。従って被造物が制限されてあるということは「被造物は被造物である」という同一的命題を言い換えたもので，これに対応する矛盾律の表現は「被造物は神ではない」というものだと解釈することもできる。「というのも，制限［limitatio］を欠いていたとしたらそれは被造物ではなく神になってしまうだろう」（GP VI, 449＝邦訳 7 , 271-272）。このように被造物が制限されてあるということは必然的真理ないし永遠真理である。

ちなみに，このような受容性による制限は，被造物の物質性を表している。『弁神論』§30で詳論される印象深い船の例で説明される「物体の自然的惰力」は，「被造物の根源的制限性［limitation］の完全な姿にして見本」である（GP VI, 119f.＝邦訳 6 , 144-146）。すなわち川を下る船の運動の速さは，積み荷，すなわち物質性が多ければ多いほど減ってしまうが，それは物質性が川の流れの作用を減じてしまっているためである。同じように被造物の不完全性，受容性とは物質性のことに他ならず，神の純粋作用に制限を加えてしまう。そしてまた逆に，物質性がないということは不完全性も受容性もないことを意味す

る。従ってライプニッツはある書簡で次のように言う。「神だけが全く物質から離れた実体であって，それというのも神は純粋作用であり受動力［patiendi potentia］を備えていないが，この受動力というのは，それがあるところではいつでも物質を示すものなのである」（GP VII, 530）。

このように被造物は本性的に制限や不完全性，受容性や物質性を含むものだが，被造物の観念的本性のうちにはこれに対応する積極的な規定もある。「被造物」とは神によって造られたもの，その積極的なもの，完全性や実在性がすべて神に由来するもののことである（GP VI, 121＝邦訳 6 , 146）。不完全性が受容性と物質性を表していたのに対し，完全性が見出される限りにおいてこの被造物には作用［action］ないし能動［agir］（GP VI, 615＝邦訳 9 , 226），また非物質性が帰せられる（GP IV, 472f.; 478f.＝邦訳 8 , 75-76）。とはいえ被造物は本質のうちに存在の理由を含む必然的存在者ではないから（GP VI, 106f.＝邦訳 6 , 125-126），自らの存在の理由を「外的原因」，それも究極的には必然的存在者のうちに求めなければならない。

こうして『モナドロジー』§30で言及されている「制限」は，被造物の観念的本性のうちに含まれた根源的不完全性として特定された。この根源的不完全性は，もう一方の完全性の側面と合わせて被造物の観念的本性を形成するわけだが，それは「被造物」という概念から分析的に導出できるような必然的真理，永遠真理なのである。

3　自我

これまでに本稿は『モナドロジー』§§29-30を，第一に，反省的作用の必要条件となる「必然的真理の認識」という側面から，第二に，自己意識に結びついている「制限」の把握という側面から分析してきた。第一の分析によれば，ここで考えられている必然的真理ないし永遠真理の認識とは，「形式に適った議論」によって観念の間の確実な関係を必然的なものとして理解することであった。第二の分析では，「制限」とは被造物の観念的本性に含まれる根源的不完全性のことであり，この観念的本性自体が被造物概念から分析的に導出できる必然的真理ないし永遠真理であるという理解が得られた。もっとも，第一，第二の分析で話題になっている「必然的真理」の意味はただちには同一ではない。第一の分析における必然性は，確実な観念連結を確実なものとして識別する一般的能力といった意味だったが，第二の分析の必然的真理は，事実の真理とは区別されて導入された理性活動の真理とほぼ同義である。いわば狭い意味でのこの「必然性」よりも，確実な観念連結に認められる広い意味での「必然性」の方がより一般的，基礎的である。

さて，本節の課題は，上の分析結果を自己意識概念に結びつけることである。これまでの分析で考察されてきた「必然的真理の認識」と「制限」は，ともにごく一般的抽象的な事柄を現わしており，まだ「私」という一人称で考えられる個別者の意識とは結びついていない。何らかの観念の連結を「必然的」と理解することも，「被造物」の概念には根源的不完全性が含まれていると理解することも，さしあたり人称性とは関わりのない一般的な認識である。目下の課題を果たすためには，「必然性」や「制限」をこの他ならぬ「私」といういわば当事者意識との関わりにおいて理解しなければならないのである。

前節に引き続き「制限」に着目し，完全性と不完全性の含意を引き出すことから課題にアプローチしてみよう。完全性と不完全性の含意のうち，能動－受動，非物質性－物質性についてはすでに見た。ライプニッツによると，ここにさらに判明な表象－あいまいな表象という対が加わる（GP VI, 615＝邦訳 9 , 226; *cf.* A VI, 4, 1553f.＝邦訳 8 , 167）。判明な表象をもつかぎりにおいてある存在者には完全性が帰せら

れ，あいまいな表象をもつものには不完全性が帰せられる。

完全性と不完全性という対比を，判明とあいまいという意味で理解した場合，我々における制限と神における制限のなさに関して非常に重要な記述が，『モナドロジー』§60（GP VI, 616f.＝邦訳 9 , 230-231）と『原理』§13（GP VI, 604＝邦訳 9 , 253-254）に見出される。ここから次のことが読み取れる。

我々の魂における表象は，その判明性の度合いにおいて常に全面的に高いわけではないという点で制限されており，判明性が低いところもあるし，いったん高くなってもまた低くなるといった仕方である。注意すべきなのは，「制限」とは魂が表象する内容ないし対象に関していわれるのではないという点である。『モナドロジー』§60の言葉でいえば，「モナドが制限されているのは，対象においてではなく対象の認識の様態においてのことである」。表象する内容という点でいえば，あらゆるモナドが無限ないし宇宙全体へと至るわけだから，この点では我々と神の間に違いはない。『原理』§13がいうように，宇宙のうちでは全てが互いに対応し調和し合っているのだから，「現在は未来で満ち，未来は過去のうちに読み取られうるし，隔たったものは近接したもののうちに表出されている」。我々における「制限」とは，むしろ，宇宙の全体のあらゆる細部を一度に判明に表象することができないという点にある。もしそのようなことができてしまったら「各々のモナドは神的なものになってしまうだろう」（*cf.* GP IV, 564）。我々が判明に表象できるのはごく近いところや大きいものだけである。遠く隔たったところや，判明に表象するもののうちに含まれるさらなる細部となると，我々はあいまいな仕方でしか表象できない。我々にとって判明に認識できない何か特定の対象があるということではないけれども，何かが判明に認識されうるようになるのは「時間とともに［avec le temps］」でしかない。全てを同時に判明に認識するということが原理的に不可能であること，あるいは時間のうちでのみ判明な認識が可能だということ，これが我々の不完全性を特徴づけている。

このような我々の制限されたあり方に対して，神は全てを一度に判明に表象する。『原理』§13で神は円周のない円の遍在する中心に譬えられているが，それは，神にとっては全てが円のうちに含まれるように完結したあり方をしていながら，中心からの隔たりがないためである。言い換えれば，神にとっては全てが直接的に現前しているため，判明性の度合いにおいて劣っているような表象は存在しない。全てが現前しているのだから過去，現在，未来といった時間的な区別も神にとっては無意味で，「神の目と同じくらい鋭い目」（A VI, 6, 55＝邦訳 4 , 23）であれば全てを判明に読み取るはずである（*cf.* GP IV, 564）。こうして，神における制限のなさは，全てのものの隔たりのなさと，その帰結としての最高度の判明性における直接的な現前ないし無時間性に存している。

だから制限の有無は，宇宙全体を表象しているという点ではなく，宇宙全体を表象する際の隔たりないし時間性の有無に帰着する。隔たりないし時間性とは，近いところと遠いところ，判明に現前しているものとしばらくたってからでなければ判明に現前しないものとの差異だといってもよい。この差異が神の場合には原理的に存在しないのに対し，我々は差異のうちでしか表象できない。

同じことをライプニッツの言葉でいえば，我々の場合は「視点［le point de vue］」が限定されているのに対して神はあらゆる視点から宇宙を眺める，ということになる。すなわち同じ都市でも見る視点が違えば異なった相貌を呈するように，多くの魂は同じ宇宙を映していてもその眺めはそれぞれの視点に応じて異なる（GP VI, 616＝邦訳 9 , 230; A VI, 4, 1549＝邦訳 8 , 164-165）。このように我々の視点が限定されているということは，我々の表象が特定の位置から発せられ，しかも限定された方向づけを与えられているということを意味している。

前節では，不完全性が物質性と結びついていることを見たが，こうした視点の限定性も被造物の物質性

と関わっている。魂が宇宙全体を表現するとしても，それは自分と特に密接な関係にある物体，すなわち自分の身体をより判明に表現し，それを介して宇宙全体をも表現するしかない（GP VI, 617＝邦訳９，231-232)。要するに，我々における制限と神における制限のなさを，物質性と結びついた視点の限定性と，物質性から完全に独立なものの視点の非限定性として捉えることもできるわけである[8]。

いまや，『モナドロジー』§30がいう「反省的作用」において把握される「制限」とは，表象が特定の視点に限定されているという事実そのもののことだということが明らかになる。個体的実体として存在しているあらゆる魂は，理性や自己意識のあるなしにかかわらず，制限された視点からのみ宇宙全体を表象している。しかし「理性的魂」と呼ばれるようになる魂は，ただ単に特定の視点から宇宙を表象するだけでなく，この宇宙の表象が特定の視点からの眺めなのだということを知る。この魂は，ただ単に制限されているだけでなく，制限されているという事実そのものを知るのである[9]。

表象作用が限定された一点から限定された方向へ向けてなされるということは，つまるところ，表象作用がそこから発する視点そのものは当の表象作用によっては捉えられないという構造に起因している。全宇宙を映す鏡は，この鏡自身あるいは鏡の背面だけは映せない。表象作用の起点が特定の一点につなぎとめられ，表象作用が特定の方向だけを向いている限り，この表象作用がそこから発する起点，すなわち視点そのものが表象内容になることは原理的にありえない。

宇宙を表象する魂が視点の限定性を認識するとき，この魂は，表象された宇宙ではなく，宇宙を表象することそのものを主題化している。とはいえ表象作用そのものを主題化するとは表象作用を対象として捉えることではない。むしろ魂は，表象作用そのものは表象できないこと，視点そのものは視野のうちには現れないことを認識する。「時間とともに」であればどんなものでも表象できる魂にとって，どんなに時間をかけても絶対に現前することのない例外的な一点が，表象作用がそこから発するまさにその地点だという構造が，ここで理解される。この構造を理解した魂が現前しないこの一点を指して発するのが「私」という語であり，また宇宙の直接的全面的な現前の不可能性の認識をきっかけにして，表象作用に不可避的につきまとうこの構造を認識する働きが「反省的作用」と呼ばれているのである[10]。

こう考えてくるなら，このような「反省的作用」の必要条件として「必然的真理の認識」が挙げられる事情にも説明がつく。すでに見たようにここでいう「必然的真理の認識」とは「形式に適った議論」によって観念間の確実な連結を「必然的」なものとして際立たせるという一般的ないし基礎的な知性のあり方を指している。実際，視点の限定性を理解するということはこの意味での「必然性」の理解をすでに前提している。表象が特定の一点に発し特定の方向へと向けられているというこの事実が，たまたまそうなっているというのではなく我々にとっては不可避の表象様式なのだということが理解されなければならないからである。従って観念間の確実な連結を「必然的」なものとして際立たせられない魂には，表象における視点の限定性を不可避的な構造として理解することも，この表象作用そのものを主題化することもできない。第二の分析では被造物概念に「制限」が含まれていることが狭い意味での必然的真理だということが明らかになったが，このことも，視点の限定性が我々にとっては必然的な表象様式だという以上のような認識を前提している。

さらに，こうした視点の限定性を必然的なものとして認識した魂は，すでに神の観念をもっているはずである。この魂は，その都度判明に現れてくるものばかりに注意を奪われている状態を，すでに脱している。視野のうちに現れてこない宇宙の部分も，そのときにとっている視点からは隠れてしまっているだけであって，自分には見えないとしても無だというわけではない。このことを理解する魂は，自分がその都度一定の視点から眺めている宇宙そのものは，特定の視点に与えられるどの眺めによってもそれ自体とし

ては捉えられないことを理解している。ここで想定されている「宇宙そのもの」とは何か。それは，特定の視点に与えられるどの眺めとも厳密には一致しないけれども一つ一つの眺めがその限定であるような宇宙である。それはすなわち全く限定されない無限の視点に現れるであろうような宇宙に他ならない。ここで想定されているような無限の視点が現実に存在するのかどうか，それはまた別問題である。ただそのような視点を可能なものとして想定しなければ，「私」に与えられているのは宇宙そのものではなく，特定の視点から見られた一つの眺めにすぎないという認識は不可能である。従って「私」という語を発する魂は，常にすでに無限なものの観念，神の観念を前提してしまっていることになる。

『モナドロジー』§29によると，必然的永遠真理を認識することで自分自身と神を認識するに至った人間は単なる動物にはない「理性」をもつことになる。ただし本稿の分析結果を踏まえるなら，ここでいう理性は，動物とは区別された人間だけがもつ何らかの特殊技能のことではない。しかし人間は，宇宙全体の直接的な現前，そしてまた自己に対する自己の現前が必然的に不可能だという不完全性を認識している点で，動物から区別される。言い換えれば，人間と動物は能力という面では何も変わらず，両者ともに不完全である。ただ人間は，自らの不完全性を知るがゆえに自己を知り，また神を知る。だからこの自己知と神の知が「理性」をもたらすというのも，動物には欠けているような特殊技能――火を起こせるとか道具を使えるといった類の――を獲得するという意味ではない。そうではなく，自分に与えられる宇宙の眺めが，単に特定の視点から見られた一つの現れにすぎないことが分かっているという認識に関するメタ認識である。動物も人間も特定の視点からしか宇宙を見ることはできないが，自分に見えているのが単なる「見え」にすぎないことを理解させてくれるのが理性なのである[(11)]。

参考文献

ライプニッツの著作，書簡の引用は次の表記法によって示す：

A＝アカデミー版全集（系列，巻数，頁数）

GP＝ゲルハルト版哲学的著作集（巻数，頁数）

Grua＝グリュア版未公刊著作集（巻数，頁数）

なお，以上の原典の出典に続いて，邦訳があるものに関しては工作舎版ライプニッツ著作集における巻数と頁数を記す。ただし日本語訳に関しては適宜改変を加えた。

Bobro, M. E., *Self and Substance in Leibniz*, Kluwer Academic Publishers, 2004

Cramer, K., „Einfachheit, Perzeption und Apperzeption“, in: Renato, C. (Hrsg.), *Leibniz und die Frage nach der Subjektivität*, Franz Steiner, 1994

Henrich, D., *Fichtes ursprüngliche Einsicht*, Vittorio Klostermann, 1967

———, „Fichtes Ich“, in: *Selbstverhältnisse*, Reclam, 1982

Jolley, Nicholas, *The Light of the Soul. Theories of Ideas in Leibniz, Malebranche, and Descartes*, Clarendon, 1990

Kaehler, K.E., „Das metaphysische und das methodische Subjekt: Von Descartes zu Leibniz“, in: Kisser, T. (Hg.), *Metaphysik und Methode. Descartes, Spinoza Leibniz im Vergleich*, Franz Steiner Verlag, 2010

Krämer, S., „Tatsachenwahrheiten und Vernunftwahrheiten“, in: Busche, H. (hrsg.), *Gottfried Wilhelm Leibniz, Monadologie*, Akademie Verlag, 2009

Kulstad, M., *Leibniz on Apperception, Consciousness, and Reflection*, Philosphia, 1991

McRae, R., *Leibniz: Perception, Apperception, and Thought*, University of Toronto Press, 1978

酒井潔『世界と自我』創文社，1987年
Schüssler, W., *Leibniz's Auffassung des Menschlichen Verstandes (intellectus)*, De Gruyter, 1992
———, „Leibinz' Begriff der Apperzeption im Rahmen der Standpunktproblematik", in: *Archiv für Geschichte der Philosophie* 76, 1994, 210-219
Thiel, U., „Leibniz and the Concept of Apperception", in: *Archiv für Geschichite der Philosophie* 76, 1994, 195-209
———, *The Early Modern Subject. Self-consciousness and personal identity from Descartes to Hume*, Oxford U.P., 2011
Wilson, M.D., „Leibniz: Self-Consciousness and Immortality. In the Paris Notes and After", in: *Archiv für Geschichte der Philosphie* 58, 1976, 335-352
山内志朗「ライプニッツの影響」『講座ドイツ観念論　第一巻』弘文堂，1990年

注

（1） A VI, 6, 14; 111＝邦訳 4 , 113; Grua II 557f.; GP III, 307f.; GP III, 339; GP VI, 501f.＝邦訳 8 , 109など。

（2） たとえばKulstadは「統覚」を第二階の心的作用と捉えつつも内的対象にも外的対象にも向かいうるとみなす一方で，「反省」については「焦点化された反省」と「単なる反省」を区別する：Kulstad 1991, 24, 39, 137-144。またクラマーは，ライプニッツの「統覚［apperception］」を表象の自己帰属に際した自己意識と捉えている：Cramer 1994, 34f., 39-42。それに対してThielは「意識」「統覚」「反省」をすべて高次の心的作用を指すものとしておおむね一様に扱う：Thiel 2011, 298f.; Thiel 1994, 208。また山内はライプニッツの「統覚」「意識」などの「自己意識概念群」を集合的に扱いつつ，18世紀以降の自己還帰性，自己関係性を読み込む読解に警鐘を鳴らしている：山内 1990, 71-91。

（3） たとえばSchüßlerは，「統覚」についても「反省」についても，『モナドロジー』や『原理』のような厳密な形而上学的体系と『新論』などのように論争相手に合わせて用語や論法を調整する場合では意味が異なると論じている：Schüssler 1992, 106f., 175-181。

（4） *Cf.* Henrich 1982, 61f.; Henrich 1967, 11.

（5） McRae 1978, 69; Schüßler 1994, 216f.

（6） Krämerも，ここで必然的真理の認識が反省に先行している点に注意を促している：Krämer 2009, 98. ちなみに必然的真理の認識が反省的作用の条件だという場合，心理学的ないし時間的ではなく，形而上学的ないし論理的な条件づけ関係を考えるべきだろう。

（7） ライプニッツは地理学や天文学の知見の多くを理性活動の真理と事実の真理を合わせた「混合的命題」として位置づけている（A VI, 6, 446＝邦訳 5 , 246）。

（8） Bobroも身体性が被造的実体の道徳的秩序の条件だと論じている（Bobro 2004, 98）が，本稿の結論を先取りしていえば，さらに進んで個別的実体の自己意識そのものが身体性を前提するとさえいえるだろう。

（9） ライプニッツにおける自己意識が実体としての存在に基づかず，単にアポステリオリで事実的な意識にすぎないような一面をもつというウィルソンの問題提起は当たらない：Wilson 1976, 344-347; *cf.* Jolley 1990, 181。ライプニッツにおいてはアポステリオリな意識は非物質的な個別的実体の存在を前提しているからである。この点で本稿は次の見方に従っている：酒井1987, 370-374; Thiel 2011, 294。その上で本稿は，個体として存在している実体が「私」という意識をもつに至るための条件とその内実を探求している。

(10) Kaehlerは自己反省的理性としては有限な主観も絶対的実体も同質とみなし，ライプニッツにおける神に自己意識というあり方を認めている。けれども自己意識は被造物の制限によって条件づけられており，絶対的実体にはありえない：Kaehler 2010, 151-153.

(11) 本稿は科研費（22820027）の助成を受けたものである。